

一、基調講演(1)

EUとナショナルリズム

一橋大学教授 梶田 孝道

御紹介にあずかりました梶田孝道と申します。座ってお話しさせていただきます。

レジュメがみなさんのところにいつていると思いますけれども、今日の話の内容は「地域統合の中の分離主義」ということで、西ヨーロッパの話を見せていただきたいと思います。ホッチキスで閉じられていると思いますけれども、四枚目の下に地図「本所報では三五頁」が載っていると思います。

地図をはずされて、地図をご覧になりながら話を聞いていただけるとわかりやすいと思います。ヨーロッパのナショナルリズムについて話して欲しいとのことで、何を話そうかと少し迷ったのですけれども、今日は、ヨーロッパ統合は一つの地域統合ですが、地域統合の中の分離主義という題でお話しさせていただきます。

それでナショナルリズムというのなかなか難しい問題がありまして、普通、ヨーロッパのナショナルリズムと申しますと、フランスとかドイツとかイギリスとかそれぞれの国を単位としたナショナルリズムの話をするのが、国際関係論の分野では普通のことではないかなと思います。しかし、後でお話ししますけれども、現在のEC、あるいはEUというものは、国々が集まって一つのまとまりを示しているというだけではなくて、それ自体が一つの社会になっています。

ですから、国が単位であると言うのは半分の真理なんですけれど、後半分はですね、国々の境界がかなり曖昧になってきて、ECあるいはEUという一つの社会が事実上できあがりつつある、そういう側面があります。ですから、国を単位としたナショナリズムを考える事はどうしても必要なんですけれども、それと同時に、別のレベルで、別の文脈でナショナリズムを考える必要があります。今日、お話しする、西ヨーロッパの場合は、一つのフランスとかイギリスとか、ドイツとかこういった国々は、いわゆる国民国家と言う形でまとまった歴史を持っております。しかし、それらの国が形成されるにあたっては、その中にはたくさん少数民族とか違った言葉を持った人がいたわけです。

それが一八世紀、あるいは一九世紀にまとまって、現在のようないたドイツとかフランスとかイタリアといった国が出来上がっているわけです。したがって、今日お話しするそのナショナリズムというのは、フランスとかドイツとかという国を単位としたナショナリズムではなく、もう少し小さな単位のいわゆる少数民族とか地域とかそういうレベルのナショナリズムのお話を中心にしていきたいと思えます。

それから、ついでに申しますと、普通そういうことは言いませんけれども、ヨーロッパのナショナリズムと言った場合に、ヨーロッパ自体が一つの単位としても考えられるわけですね。ですから、ヨーロッパ・ナショナリズムという言葉はもちろんありませんけれども、本当にEUがもっと緊密な度合を深めていけば、ヨーロッパが一つの国として考えられるという時代がやがて来るかもしれません。

ですから、ナショナリズムというものを考える場合には、現在の国家を単位としたナショナリズム、それからもっと小さな地域とかマイノリティーとか、そういう少数民族を単位としたナショナリズム、それからヨーロッパを単位としたナショナリズム、そういうものを同時に考えていく必要があると思います。もう少しだけ前置きをさせていただきますと、六〇年代、七〇年代に、実は四ページ目の図表に載っておりますように、戦後のヨーロッパというのは

比較的安定した地域ではありませんでしたが、いろいろなところで少数民族の運動が起きました。これはほとんどご存じないと思いますけれども、たとえばそこに書いてありますように、フランスでは南フランスのある部分のことを「オクシタニー」と申します。それからフランスの北西部は「ブルターニュ」と言っております。フランスと言うのは地図をご覧になるとわかるように、だいたい六角形をしています。

だいたい六角形のそれぞれのすみに少数民族が存在するというのが大まかな理解です。たとえば北西部はブルターニュと言い、これはもうフランス語とはまったく違った言葉を話す人達が現在でも少数ながら存在します。それから南西部にはバスクと言う地域もあります。これもフランス語とかスペイン語とは全く違った言葉を話す地域です。それからオクシタニーはオック語という、これはフランス語と近い言葉ですけれども、そういう言葉があります。それからみなさんがご存知のところでは、地中海にコルシカという島があります。これはナポレオンが出てきたところで、その時代からずっとフランスの領土の一部です。これはほとんどイタリア語の地域ですね。

それから北にさかのぼりまして、東部にアルザスというところがあります。これは後で詳しくお話しますけれども、例えば「最後の授業」という小説を聞いた事があると思えますけれども、これまでドイツとフランスはいつも戦争をしていたわけですが、それによってアルザスはフランスの領土になったり、ドイツの領土になったり、またフランスの領土になったりしました。言葉について言えば、アルザス語というのはドイツ語の方言という風に言われています。

それからさらに北に行きますと、隣の国はベルギーです。ベルギーも複雑なところがありました、後でお話しますけれども、北半分と南半分では言語が違います。北半分の言語はオランダ語です。それから南半分はフランス語です。どうしてそういう国ができたのかというのは、話せばきりがないので、ここでは省略します。北半分のベルギー

はフランドルと申します。そのフランドルの言葉は、フラマン語といたりオランダ語といたりしますけれども、その一部がフランスの北東部に入ってきています。ですから、六角形の六つの隅に現在でもフランス語とは違う言葉を話す人々が存在します。もちろん、彼らは全員フランス語を話しますが、フランス語と同時に別の言葉を話す人達があるということです。

このようにフランスの例をあげましたけれども、同じような例がイギリスにもありますし、ベルギーにもありますし、スペインにもあるということです。そういうところですね、今日は詳しくお話しませんけれども、六〇年代、七〇年代に、いろいろな民族の要求、例えば自分達の言語を認めて欲しい、自分達に政治的な自治権を与えて欲しいとかですね、あるいは経済的に遅れているので経済的な格差を是正して欲しいとか、そういう要求が出てきました。その当時はヨーロッパ統合はまだあまり進んでいませんでした。したがって、そういう民族の要求ということに對して、それぞれの国は非常に警戒しました。これは分離主義ではないか、民族国家が分裂するのではないか、そういう理由で非常に警戒いたしました。これは六〇年代、七〇年代です。当時は、まだ皆さんは生まれているか、生まれていないかという時代ですけれども、いわゆる高度経済成長期でした。したがって、この時代には、こういう民族問題があらわれるというのは、誰も予想しなかったわけです。

その当時は、民族問題などは古臭い問題であって、社会が近代化されたり、あるいは産業化されれば、少しずつなくなっていくだろうと考えられていたわけです。

ところが、高度成長期の真っ只中で、しかも先進国の中心でこういった問題があらわれてきたということが非常に注目を引いたわけです。

その頃から、民族問題というものが、社会学とか政治学とかの学問の研究対象になり始めてきたということです。

私自身もそういう時代にこういう勉強を始めました。時間的には二〇年くらいになるかもしれませんが、まあそういう歴史を歩んできたわけです。その後、六〇年代、七〇年代と比べて状況は一変いたしました。なにが変わったかという点、ヨーロッパ統合が非常に進展したということです。EC統合について詳しくお話する暇はありませんけれども、重要な点だけ一つ二つ申しますと、これが進んできたのは、だいたい八〇年代半ば以降ということです。皆さんも知っていると思いますけれども、ジャック・ドローールというフランス人がEC委員長に選ばれて、この人が、非常に辣腕を奮ってEC統合を進めました。

個人の努力もありましたが、いろいろな大きな事件もあったわけですね。一つは言うまでもなく、ソ連とか社会主義国が崩壊したという点です。これで八〇年代終わりに、東が非常に不安定になってきたわけですね。これが一つの大きな要因です。それから、それと関係して東西ドイツが統合しました。これによってドイツが非常に大きくなるということがありまして、ECは大丈夫か、今後どうなるのかという議論がでてきたわけです。こういう事によって、ECを強固なものにしなければならぬという気運が非常に高まりました。その気運によってドローールは、統合を進めていったわけです。

それからもう一つの要因はもちろん経済の問題です。戦後、日本の経済は成長しました。アメリカも衰退したとはいえ、まだ、強いものがあります。そういった状況の中で、ヨーロッパは、相対的に落ち込んでいったわけです。その落ち込みを何とか救わなくてはならないということのできたのが、ヨーロッパを一つの経済単位にしよう、それによって個々のばらばらの経済を一体化して、効率あるものにしよう、ヨーロッパが一体になって日本とかアメリカに對抗しようということです。その結果なされたのが、一九九二年の欧州市場の統一です。つまり、ヨーロッパ全体を一つのマーケットにするということですね。その中では、物の移動も自由になりますし、お金の移動も、それから労

働者の移動もすべて自由になるということです。これが非常に重要な役割を果たすことになりました。それから、さらに東西ドイツの統一などを受けまして、九〇年代に入ってマーストリヒト条約が結ばれました。これは欧州連合条約の俗称なんですけれども、ここでなされたのは、経済の統合だけではなくてユーゴスラビアなどいろいろな問題がありますので、政治的にもあるいはもっと様々な領域でヨーロッパを一体化しようということなんです。条約は結ばれましたけれども、その後なかなか進展しないというそういう難しい面もあります。そのマーストリヒト条約迄はヨーロッパ共同体 (European Community ≡ EC) という風に言われていたわけですね。そのECを内部で含む形でヨーロッパ連合というものが作られました。略称EUという風にいつていますけれども、実際上EUといってもECといっても大きな違いはないと思います。

そこから今日の本題に入りたいと思いますけれども、こういう状況の中で先程も言いましたように、ヨーロッパというのは幾つかの国が集まって連合しているという面はもちろんあります。しかしもう一つの面は、国の権限をECに移譲してしまうわけですね。それによって、国境も低くなりますし、あるいはなくなってしまふ。したがってそのEC、EUが一つの社会になっていくということです。ですから、そういう意味で幾つかの国が集まって、ECというものを作っているという風には単純にはいえないのです。もっと事情は複雑だということです。こういう状況の中で、先程六〇年代、七〇年代の民族運動について少し話しました。ブルターニュであるとかバスクであるとか、カタロニアであるとかですね。こういう地域の民族運動がでてきたわけです。これらの運動は、それぞれの国民国家、つまり、ブルターニュのように、フランスの中の民族問題でしたら、パリ政府、バスクや、カタロニアの場合はマドリードのスペイン政府、こういう国がいわば敵だったわけです。国に対して自分達の要求を突きつけてきたわけです。ですから、国の方も自分達の国が分裂するんじゃないかといった脅威を持っていたわけです。

ところが、ヨーロッパが統一される事によって、国境が非常に低いものになりました。ほとんどの人達にとっては、まったくと言っていいほどコントロールがなくなってしまったわけです。ですから、そういう意味では、国だけが単位ではなくて、ヨーロッパという新しい単位、新しい文脈が生まれてきたと言えると思います。ですから、例えば、パリの政府を敵にまわすということだけではなく、もっと自由に行動をする事ができるようになってきたわけですね。ですから、民族の主張も国からの分離・独立運動という形を必ずしもとらないようになってきたということです。

私は、そういう状況を指して三空間併存という言葉を使った事があります。三空間併存とはどういうことかという点ですね、例えば、カタロニアというスペインの地域があります。しばらく前にオリンピックが開催された所ですね。バルセロナという所でオリンピックがありましたけれども、この時、皆さんは覚えているかどうか知りませんが、世界中の新聞にカタロニアの広告がでました。一面全面広告ですね。要するにカタロニアというのは一つの国であるということを宣言した広告です。驚かれた方も多いと思いますけれども、一つの地域であると同時に国であるということですね。その時はオリンピックの公用語として、確かスペイン語とフランス語とか英語とかもちろん使われましたけれども、それらと同時にカタロニアの言葉も公用語として使われたということですね。非常に面白い事件だったと思いますけれども、これを例にとりますと、カタロニアと言うのは一つの地域である、あるいは民族である。それから同時に、スペインという国にも属している。彼らはまたヨーロッパ共同体にも属している。そういう意味で、EC (EU)、国家、地域という二つの空間に属すようになってきたという風にも言えると思います。そういう状況を指して三空間併存という言葉を使ったわけです。

こうした例は今の世界ではヨーロッパぐらいだろうとは思いますが、例えば先日APEC (アジア太平洋経済協力会議) が開かれました。あるいは北アメリカでは、NAFTA (北米自由貿易連合) というものが作られてい

ます。まだまだたいした存在ではありませんけれども、そういうものがすっかりと土台をもってきますと、人々は北米に属す、それからカナダに属す、と同時にケベックに属す、といった同じような三空間併存の状態がヨーロッパ以外でも生まれてくるかもしれません。まだまだ時期尚早ですけれども、そういう視点をもっていく必要があるのではないかと思えます。

今日はその中から幾つかの事例を紹介してみたいと思えます。四頁目の地図を見ながら、同時に別のレジュメを見ながら聞いていただきたいのですが、幾つかの例をお話ししたいと思います。

これはそれぞれ今現在どういったことが起こっているのかということと十年前とか二十年前といった話ではありません。現在どういった事が起きているのかということとをできるだけ簡単に話したいと思います。

まず第一は、皆さんあまりご存じないと思えますけれども、ベルギーという国の話です。ベルギーという国はブリュッセルという首都がありまして、同時にヨーロッパ連合の事務局が置かれているところです。ですから、EUの首都とっていいと思います。位置的にもヨーロッパの中心に位置している。私も一年間ほど過ごした事があるのですけれども、そこからはヨーロッパのどこへでも、決意すればその日のうちに数時間で行けるということですね。日本国内での移動の方がずっと面倒くさい、という感じがします。

それで、それが一つの特色なんですけれども、もう一つはさっきも言いましたように、国の言語が一つではないということです。簡単に申しますと、南半分がフランス語圏、北半分がオランダ語圏という形になっています。地図でもですね、なんとなく白い線が引かれているという風に思えますけれども、北をフランドルという風に申します。それから南をワロニーという風に申します。北の中に島のようにブリュッセルという、これは首都ですけれども、そういうものが浮かんでいます。ブリュッセルではフランス語とオランダ語両方が話されています。こういう複雑なところ

ろです。昔からフランス語系とオランダ語系の対立が激しかったわけですね。

もともとはフランス語系の方が有利だったのですけれども、次第にオランダ語系が巻き返してきまして、要するに言語上の境界を求めるといことが始まったわけですね。一つだけエピソードを話しますと、ベルギーには一番有名な大学にルーヴァン大学と言うものがあります。これはフランス、つまり北部にあるのですけれども、オックスフォードとかケンブリッジと同じく長い歴史をもった立派な大学です。ところが、そのルーヴァン大学には神学部がありまして、神学と言うのはキリスト教ですから、ラテン語を使っているわけですね。それがだんだん普通の言葉に変わってきて、フランス語で教えるようになった。つい数年前までフランス語で教えていたということですね。

しかし、その大学が属している地域はオランダ語圏ですから、オランダ語の人達はけしからんと言ったわけですね。自分達の土地にある大学がフランス語で教えられるなんてけしからんと、オランダ語の大学を作って欲しいと主張したわけですね。これが大体六〇年代の終わりくらいですね。やはり先程の六〇年代、七〇年代の話なんですけれども。それで結局、ルーヴァン大学はオランダ語の大学になりました。ブリュッセルの東二十キロか三十キロくらいのところに位置しています。皆さんの地図上を探せば出て来る町なんですけれども、今はその大学ではオランダ語で教えられています。

そうすると、フランス語系も黙っていらなくなるといことになります。そのため、南のワロニーに第二ルーヴァン大学というものが出来上がりました。これも面白い町ですね。私は二つの大学に行った事があるのですけれども、第2の大学のある町はルーヴァンという町を真似て作った非常に人工的な町で、好き嫌いの好みはありますけれども、非常に面白いところですね。ルーヴァン大学で学会がありますと、お互いにまったく違う大学ですから、どちらなのかわからなくなります。オランダ語のルーヴァン大学、フランス語のルーヴァン大学という形に別れていますけれども、

全く別の大学です。ですから外国人泣かせでして、ルーヴァン大学でシンポジウムが開かれると、どっちのルーヴァン大学なのかわからないわけですね。かならず何人かの犠牲者が出るといわれています。

こういうことでだんだんだん平等化が進んできたということですね。でもやはり仲が悪いという状況があまりまして、一つの国ではあるけれども、お互いあまり付き合いたくないという状況が続いてきたわけです。これは非常に小さな国です。だいたいフランドルとワロニーを分ける白い線が地図にも書いてありますけれども、ちょうどそれにそって、東西に自動車を走らせても、三時間か四時間くらいしかかかりません。ですから小国といっていると思います。しかし、その小国が今日連邦化を始めているのです。連邦化というのは、民族それぞれの自立へというか権利を分割して、自分達の事は自分達でやっということですね。そういうことが行われてきました。連邦制というものが敷かれてきたということです。

細かい事は省いて行きたいと思えますけれども、こういうことが進んできました。但し、オランダ語系とフランス語系を見てきますと、必ずしも同じとはいえないのです。なぜかと申しますと、ブリュッセルという地域は、先程フランス語とオランダ語の両方話されていると言いましたけれども、約九割がフランス語系で、約一割がオランダ語系です。ですから、ほぼフランス語圏と言ってもいいですね。フランドルの場合はオランダ語圏です。それに対してフランス語圏というのは南半分のワロニーとブリュッセルを足したものであると考える事もできると思います。

一つの連邦化が進んできてということが起きたのかと言うと、今まで以上に付き合わなくなってきたということですね。事実上、民族間に一種の離婚状態が存在していたと言ってもいいと思いますけれども、それでもいやでも一緒にいなくてはならなかったわけですが、今は付き合う時間が少なくなってきたという風にも言えると思います。

もうひとつ面白いのは、それによって代議士といったエリートの行動様式が随分変わってきたということです。も

ちろん今まで重要な政治家というのは国のレベルで働いてきたわけです。国会議員だったわけです。国会議員であり、大臣だったわけです。しかし事実上、連邦化が進みますと、フランドルという政府ができる、ワロニーという政府ができる、ブリュッセルという政府ができる。非常に多くの政府ができるわけです。

したがってエリート達は一番重要なところで働きますから、国よりも地域の方が重要になってくると、地域の方で働くようになってきた。その結果として、国とか国会はからっぽ状態になり、そういう新しい状況すら生まれてきているということ。国家が空洞化してきているということですね。その結果、實際上重要な地域としてはベルギーという存在がはっきりとしなくなってきたということ。もっとはっきりとした単位ではフランドルであり、ブリュッセルであり、ワロニーであるということです。こうなると、事実上そんなに付き合いがないんだから別れればいいんじゃないかという意見が当然出てきます。分離独立という主張です。これまではそういう主張をするのはタブーだったのですが、今日においてはそういう主張はタブーではなくなってきました。こういう大胆な主張をする人達は特にフランドルの人の中に強いんですけれど、分離独立を掲げる政党が数十パーセントの得票率を得るといような状況も生まれてきています。

ただし、そうはいつでも分離するのかと考えますと、私はそうは思いません。幾つかの理由があります。一つはブリュッセルの存在です。これはフランス語系が多いのですけれども、オランダ語系もいるわけです。ですから、ブリュッセルをフランス語系に明け渡すわけにはいかないというところがあります。しかもブリュッセルというのはヨーロッパ連合の首都ですね。非常に地の利がいい。ベルギーは小さな国ですから、国として主張しても誰も聞いてくれないわけです。そうじゃなくて、ヨーロッパを背景にして主張すると、非常に力を得て来るといふことになります。

ですから、オランダとかベルギーというのはヨーロッパ統合に対して非常に熱心な国です。それはヨーロッパ統合

論者が多いという事もありますけれども、国の利益を生かすためにはヨーロッパ統合が必要なわけですね。ですから、国の主張とヨーロッパの主張がほとんど同じになって来るわけです。そういうこともありまして、要するにブリュッセルを手放すわけにはいかない、ということではフランスだけ別れる事は簡単なんですけれども、それもできない。その結果、事実上の離婚状態ではあるけれども、国としては残っているという状況になるわけです。

それからもう一つは、そこにも書きましたけれども、ベルギーはチェコスロバキアとは非常に対照的です。チェコスロバキアはですね、しばらく前にチェコとスロバキアに分離いたしました。これはチェコとスロバキアが民族的には近いと思いますけれども、しかしテリトリーとしてはっきりと分かれていたということがありまして、分離しやすかったわけです。ところが、ベルギーにはブリュッセルという存在があるために分離できないということ、しかもヨーロッパ統合と言う御墨付きがありますから、わざわざことを荒立てる必要がないということ、ですから、地域間の隔離がベルギーの場合には相当進んでいるということ、です。

次にイギリスの話をしたと思います。イギリスには北の方にスコットランドという地域があります。皆さんも多分ご存じだと思いますけれども、イギリスの正式名称。入学試験問題みたいですけど、正式名称は、グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国と言います。これはグレートブリテン島と北アイルランドの連合国ということ、です。略称連合王国 (United Kingdom) と言う風に言います。もともとはこれだけではなくて、沢山の植民地を持っていたわけです。大英帝国と言っていたわけです。

大英帝国という大きな単位があり、その中に現在ののような連合王国のようなものがあり、それからさらに小さな単位としてスコットランドとかウェールズがあったという風に考える事ができます。ところが、戦後大英帝国の植民地がどんどん独立していきました。インドとか東アフリカとか、マレーシアとかですね。これによって、イギリスは帝

国から国民国家に変わっていったわけですが。

帝国とは何かを考える上で非常に面白いのですが、帝国というのは、国籍と言うものを持ちません。誰でも自由に現在のイギリスに入る事ができました。したがって国籍というものがなかったために、現在の例えば香港人とかインド人とかが自由に入ってきたわけですが。それがだんだんなくなってですね、七〇年代になって初めて、イギリスはじめて国籍というものを持った、という非常に驚くべき事なのですが、アジア・アフリカ系植民地の出身者を入れなくしたということなのです。つまりグレートブリテン島に住む人間だけがイギリスのメンバーシップを持つということを決めていったわけです。ですから、植民地の人達にとっては非常に入りにくくなったと思います。

但し、面白いのは既に入った人達の場合ですね、これは非常に日本と違っているのですけれども、政治的には白人たちと一切差別をしていません。したがってインド人でも何人でも、すでに入っている人達は、白人のイギリス人と同じようにすべての権利が与えられています。国政選挙とか地方選挙とかすべての権利が与えられています。こういう点も帝国の名残りと言うか、非常に面白い点だと思えます。

ところで、現在のイギリスは大きく分けて、イングランド。英語というのはイングリッシュと言いますね、イングリッシュというのはイングランドの言葉という意味です。それ以外にウェールズ、スコットランド、北アイルランドという地域があります。その地域の言葉はだいぶ衰退してしまっていて、現在では、ほとんど英語になっていきますけれども、元々は、言葉もいろいろな習慣も違っていたということが重要な点です。

スコットランドは元々イギリスに属していたわけですが。一八世紀、一九世紀というのはヨーロッパで多くの民族問題（ナショナリズム）が起きましたけれども、スコットランドでは、その時、ナショナリズムの動きがほとんどありませんでした。それはなぜかと申しますと、すぐわかると思いますけれども、イギリス全体が非常に羽振りがいい

時代だったわけですね、スコットランド人もイギリス人として活躍していたわけですね。兵隊になったり、いろいろ活躍していたわけですね。

ところが戦後になると状況が変わってまいりました。なぜかというところ、大英帝国が崩壊してしまったわけですね。大英帝国に加わっているメリットがあったわけですね、以前は。だからスコットランド人は、民族的にはイングランド人とは違っていたけれども、文句を言わなかったわけですね。ところが、一九六〇年代以降になると、状況が変わってきました。イギリス病というものが生まれてきた。スコットランド人はイギリスに属している事あまり魅力を感じなくなりました。そういう状況で、今まではいろいろ恩恵に浴する事ができたわけですね、むしろ悪い事の方が目立ってきた。つまり、イングランドとスコットランドが対立する状況になってきたということです。

こういう状況の中でスコットランドの一部の人達は分離独立しようじゃないかということを出したわけですね。その中でそこにSNPと書いてありますけれども、これはスコットランド国民党という風に言っていますけれども、こういう小さな政党がかなりの得票率を得るようになってきました。そういう過程でスコットランドは独立しますよと言ってきたわけですね。それに投票する人達も随分増えてきたということです。二十パーセントと三十パーセントとかそれくらいは達したと思いますけれども、その理由はその時、北海油田と言うものが発見された。北海油田というのはイギリスとノルウェーの丁度中間くらいの地点で発見された大きな油田です。当時イギリスは経済状況が悪かったわけですから、北海油田が発見された事を非常に喜びました。

先進国の多くは石油を中東から輸入しているわけですね、イギリスは輸入していません。先進諸国のなかでは非常にめずらしいケースです。ところが、その時北海油田の場所はですね、地図に出ていないのが残念なんですけれども、スコットランドの沖合いです。ですからスコットランドから見ると、北海油田は自分達のものだと言いつ

たわけです。スコットランドのものだと考えれば、油田もあるし、独立したって十分やっていけますよと言ってきたわけです。だからイギリスは困ってしまったわけですけど、スコットランド側は、逆にこういう事を言って、イギリスに譲歩してもらおうという戦術だったとも思います。彼らがどこまで本気で分離独立を叫んだかどうかわかりませんが、分離独立ということで妥協を引き出すという面もあったのではないかと思います。

もう一つ面白いのは次の点です。イギリスは一九七三年にECに加盟しました。もっと前に入りたかったのですが、けれども、フランスが反対して入れなかったということがあったわけですね。その時スコットランドがイギリスがECに加盟する事をどういう風に思っていたかと言いますと、決してよく思っていなかったのです。SNPはEC加盟に反対しました。これは何故かと言いますと、単純な理由なんですけれども、この地図を見ればわかるように、ECの中心はやはりヨーロッパ大陸です。フランスとかドイツとかベルギーです。したがってヨーロッパ統合に加わり、ECに入る事によってですね、スコットランドはイギリスの中でも周辺部ですけど、これに加えてヨーロッパの中でも周辺部になるのではないかと、入ったところで、スコットランドに何の得もないと思ったんだろうと思います。こういうことでEC加盟に反対いたしました。

ところが八〇年代に入って、状況が少しずつ変わってまいりました。スコットランド国民党は、ECに入ることに反対したのだけでも、現在では入ってよかったと思っっています。それどころか、SNPはヨーロッパ統合を非常に熱心に主張する政党になってきています。これはなぜかと言いますと、八〇年代終わりからですけど、SNPはまた分離独立ということ掲げ始めまして、ヨーロッパの枠内での独立ということを言いだしています。つまり、イギリスから別れたって、ヨーロッパで我々はやっていけるよと。スコットランド人の人口も多いですから、例えばルクセンブルグという小さな国がありますが、そうしたルクセンブルグよりもずっと人口が多いんだと。

したがって、ヨーロッパの一国としてやっていけるよという主張がなされたわけですね。なぜこういう変化が起きてきたかと言いますと、これは幾つかの理由があります。一番大きな理由は、EC、EUがヨーロッパの周辺のみだ開発が進んでいない地域に沢山の開発援助をしたからなのです。これは、主にEC内の途上国に対して、——途上国という言い方は適当かどうかわかりませんが——、相対的な途上国、例えばポルトガルとかですね、ギリシャとかですね、スペインとかアイルランド、こういうところに開発の援助をしてきたわけです。

EC統合に対して誰が統合に賛成し、誰が反対するのかということを考えるのは、非常に面白いんですけども、もちろん統合を進める一つの勢力はベネルックス三国つまりベルギーを含めた中心部ですね。それからもう一つはこういう周辺国なのです。周辺国はヨーロッパに入る事によって非常に得をするということなのです。ですから、同じ開発基金がスコットランドにも投入されてきたわけです。そういうことによって、SNPはECは我々の事を非常によく考えてくれていると考える文脈がでてきたわけです。したがって、スコットランドはECを必要としているけれども、イギリスは必要としていないよということを出してきたのです。これがヨーロッパ内での独立ということなのです。

しかしよく見て見ますと、そういう風に言っているかどうかには疑問な点があります。なぜかというところ、ヨーロッパというのは、スコットランドに限らず、イギリス人全体がそうなんですけれども、ヨーロッパと言うとヨーロッパ大陸をさすというニュアンスが非常に強い。したがって、自分達はヨーロッパ人ではないというニュアンスがしばしば見受けられます。そういう意味では、スコットランドは自分達の主張をするための手段としてヨーロッパを使っているという感じがします。自分達自身はヨーロッパ人であるという自覚があまり強くないという感じがします。

分離独立のコストを低下させるものとしてEUという風に書きまされたけれども、今日、こういう性格が出てきてい

るわけですね。EC、EUというものがもしなかったとしたら、イギリスから独立するということは非常に勇気のいる事です。ところが受け皿が出来てきたわけですから、分離しても、ECの一メンバーとしてやっていけるという、あまりドラスティックな変化が起きないだろうという新しい意味が出てきたのです。それが、分離独立のコストを低下させるものとしてのEUということなんですね。

後でお話ししますが、ケベックと北米自由貿易連合との関係も実は似たようなところがあります。今年の十月にケベック州で、分離独立に関する州民投票が行われました。分離は否決されましたけれども、そこでもやはりNAFTAという地域統合ができてきたことによって、新しい受け皿があるから、カナダから離れるのではなくて、NAFTAの一員として残るんだ、あるいは残れるんだ、したがって分離独立をしてもコストは余りかからないんだという意見が出てきています。こうして見ますと、さっき三空間併存と言いましたけれども、こうしたモデル自体が歴史的にドラスティックに変わってきたということがいえます。大英帝国の時代には大英帝国とイギリスとスコットランドというこういう三空間の併存がありました。ところが植民地が独立してイングランド対スコットランドという国家と国家、あるいは民族と民族の対立という形になってきている。ところがヨーロッパ統合ということが誕生する事によって、EUと国家と地域という三空間併存の時代に入りつつあるのかもしれない。スコットランドをとりまく文脈にも、そういった文脈が現れてきているということです。

一転して、フランスの話をしたと思います。ここでは、フランスの中でアルザスというところを取り上げて見たいと思います。アルザスは、さっきも言いましたけれども、「最後の授業」か何かで、皆さんどこかで聞いた事のある地域ではないかと思えます。フランスとドイツの間にはアルザス・ロレーヌという地域があります。フランス語ではアルザス・ロレーヌというふうに言います。ドイツ語ではエルザス・ロートリンゲンと言いますけれども、フラン

スとドイツは何度も喧嘩をしてきた。したがって勝った方がアルザス・ロレーヌを獲得してきたという経緯があります。第二次世界大戦では、ナチスドイツがフランスに侵攻しまして、その結果、ドイツ系というか、アルザス語というのはドイツ語の方言と考えてもいいと思いますけれども、したがって、ドイツから言えばアルザスはドイツの一部だという意識があったと思いますし、アルザスの方でもドイツに加担しようという動きが一部にありました。

したがって、アルザスは非常に危険な歴史を歩んできたわけですね。ナチスドイツに加担したという歴史です。ナチスドイツは多くの人を殺したわけですから、そういう歴史もありまして、アルザスは戦後、できるだけ戦争を清算したいという意識を強く持ちました。その結果、戦後のアルザスはフランスに戻りましたけれども、彼らは政治的なナショナリズムを一切放棄するということをしてきたわけです。

つまり、アルザスは政治的な主張、分離独立も含めて一切いたしませんよということですね。我々は独自に政治的な主張をいたしません。ドイツに戻るなんていうことはいたしませんということですね。その代わりとってはなんですけれども、政治的には黙っているけれども、むしろ文化的、言語的にはアイデンティティを追求したのですね。政治の領域では黙っているけれども、文化的にはアルザス人は存在するのだという主張をしてきたわけです。ですから、そういう意味でアルザス人のアイデンティティというのは、政治の領域と文化の領域の間に引き裂かれていると言えると思います。

ただ普通の選挙の場合に、アルザスの人は他の地域の人々と比べて、特別違った投票行動をするような事はありません。政治的にはほとんどフランスと同じになっています。但し、文化とか言語の面では非常に違うということが言えると思います。これも旅行して見ればすぐにわかると思いますけれども、ほとんどの人がフランス語とアルザス語を話します。つまり二言語併用ということですね。公的な役所とか学校ではもちろんフランス語を使いますが、

スーパーマーケットなどに行けば、アルザス語が話されているということです。

さっき六角形の隅に違った言語があると言いましたけれども、もともと少数民族の言語が残っている地域がアルザスです。そういうところですね、このアルザスをとりまく状況も、ECが進行する事によってまったく変わってまいりました。つまり、この地域はスコットランドとは対照的に、ヨーロッパの中心に位置しているということなのです。お隣はドイツです。ヨーロッパ統合を進めてきた二つの力はドイツとフランスです。したがって、アルザスは非常に特殊な位置にいます。

EUの一つの機関ですが、欧州議会というのがアルザスにあります。ヨーロッパ連合の直接選挙で議員が選ばれる、その欧州議会の会場がストラスブールというアルザスの都市にあります。これにはいろいろ問題があるので、さっきのブリュッセルと並んで、ヨーロッパの第二の首都と言えるかと思えます。それからECとは別の国際機関なのですが、欧州審議会と言う、人権問題を熱心に議論するヨーロッパの機関があります。その本部もストラスブールに置かれています。ですからストラスブールという都市は、ヨーロッパの代名詞になりつつあると言えると思います。

さっきも言いましたように、戦後の歴史を一番特徴付けるのはフランスとドイツが手を結ぶようになったという新しい事態です。つまりフランスとドイツが戦争をしてきたわけですね。第一次大戦も第二次大戦もそうです。したがってフランスとドイツが戦争をしないようにしないと、ヨーロッパが平和にならないということから、ECが生まれたといってもいいと思います。

こういう状況の中で、アルザスというのは、非常に特別な意味を持ってきたということです。彼らはフランス人です。しかもフランス語もドイツ語も話すわけです。そういう点で、アルザスはフランスとドイツのいわば掛け橋にな

るところがあります。ですから、今までは一つの国の中で、フランス語以外の言葉を話すということは、非国民とは言いませんけれども、あまりいいことじゃなかったわけですね。ところが今日では、フランス語とドイツ語を話すというのは、フランスとドイツの友好の掛け橋になるという状況になってきたわけです。しかしさっきも言ったように、ヨーロッパの中心ということもありますから、アルザス語を話すということは、ヨーロッパのためにもなるし、フランスのためにもなるということですね。それに加えて、非常に多くの人達が毎日、国境を越えてドイツの工場とか会社に働きに行っています。こういう人達の事を越境通勤者と言います。越境通勤者というのは、朝と晩と国境を越えて働きに行く人たちのことです。こういう人達が、この地域には沢山おられます。

ドイツで働くためにはドイツ語が必要なわけですね。ですから、アルザス語を話すということは非常に有効なわけです。そういうこともありまして、アルザス語というのはドイツ語の方言でありますけれども、それにとどまらない意味を持ってきました。こういう事からアルザスの場合には、国家との緊張関係はほとんどありません。もちろん分離運動もありません。アルザスの文化的な主張をする事が、そのままヨーロッパ統合と直結するわけです。そういう意味で、私はこれをトランスナショナルな地域主義と呼んでみたいと思います。トランスナショナルというのは、脱国家・超国家という風にある研究者が言いましたけれども、国家は存在しますけれども、国境を超える、そういう現象をトランスナショナルという風に言います。多国籍企業の事をトランスナショナル・コーポレーションと言いますね。例えば、酸性雨とか、現在の状況から言いますと、公害なんかも、国境を超えるわけですね。これは典型的なトランスナショナルな現象といっていると思います。

事実、マーストリヒト条約、詳しい事は省略しますが、フランスで批准投票が行われまして、実際、五一対四九くらいのわずかな差で辛うじて可決しました。フランスはやっと可決して条約にこぎつけたわけですが、

このアルザスにはおいては、六割か七割の人が条約に賛成しました。ですから、かなりの人にとっては、マーストリヒト条約は必要な事だったわけです。

それと似たような地域としては、スペインのカタロニアがあります。これはアルザスとかなり性格が近いのですけれど、でもちょっと違うなという感じがします。スペインでは、フランコ時代という独裁時代がありました。フランコが倒れた後に、民主化が進行しまして、スペインはECに加盟したわけです。そうする事によって、政治的にも経済的にも安定してきました。今日、社会労働党という社会民主党系の政権がずっと政権を握っています。さきほどのバスクだとか、カタロニアと言った地域は、スペイン語とは別の言葉を話す地域なのですけれども、フランコ時代にはこれらの地域は弾圧されてまいりました。バスク語を話すだけでひっとらえられて牢獄に追い込まれるということが行われてきたわけです。つまり、バスク語とかカタロニア語とかが禁止されていたわけです。

ところが、こういう状況がなくなりまして、バスクとかカタロニアに自治が与えられるようになりました。これは七〇年代頃だと思えますけれども、スペインでも地方分権化が進んできたということですが、ただ、単に地域として権利が与えられたわけではなくて、これはナショナリダーとスペイン語で言うのですけれども、バスクやカタロニアはある特別な権利が与えられてきたということです。地方自治の単位としてだけではなく、民族的な単位としても一定程度認めるといふことです。現在はバスクとかカタロニアは自治政府となっております。当然選挙が行われるわけですが、バスクとかカタロニアの政府にはスペインの全国政党ではなく民族政党が当選しています。つまりバスクなんとか党とかカタロニアなんとか党がその州の政府を握っているわけです。そういう状況です。もう一つの点はですね、それと平行して言語とか文化の面で自治が非常に進んできたということですが、現在、スペインでは社会労働党とそれから保守系は全国レベルでは拮抗しておりまして、それ以外にはあまり大きな勢力はありませんけれど

も、カタロニアのCiU、バスクのバスク国民党が若干の議席を占めています。そのCiUというのはカタロニアの政権ということ。バスクの場合にも同じような民族政党です。保革が接近するなかで、こういう民族政党がキャスティングボートをにぎるようになってきたわけですね。現在の社会労働党を支持する代わりに、われわれも助けてほしいと言っているわけです。

そういうことによって、今まで以上に、バスクとかカタロニアに文化的自治が拡大されるようになってきたわけですね。

ここでもヨーロッパの統合を進めるような動きが進んでいます。ヨーロッパ統合に非常に積極的という状況です。ただ、アルザスと違う点の一つあげますと、やはりここでも、アルザスと同じようにスペイン語とカタロニア語とが併存状況にあるわけですね、ただアルザスの場合には、あくまでもフランス語が主です。それにプラスしてアルザス語が話されるということですね。

ところがカタロニアの場合には、カタロニア語は公式の言語として認められているわけですね。もちろんスペイン語も公式の言語なんですけれども、二つの公式な言語の併存状況が生まれてきている。場合によっては、カタロニア語の方が優位になってきているわけですね。カタロニアでは、これはかなり先進的な産業地域なんですけれども、日本での出稼ぎと同じようにですね、国内の移民が非常に多いわけですね。国内の貧しい地域から非常に多くの労働者が入ってきているのです。したがって、その人達はほとんどスペイン語を話します。その出稼ぎ労働者達もカタロニアへ入ってくると、カタロニア語を学習しなければならぬという状況になって来るわけですね。

そういう状況もあって、スペイン語だけを話す人も結構いるわけですね、その人達にとっては、スペイン語が話しづらい状況になってきているわけですね。逆差別ではないかという状況すら生まれてきている。ただ先程のアル

ガスと同じようにですね、独立の要求は昔は強かったのですけれども、ヨーロッパ統合に新しい意味を見出しているということもありまして、分離独立の主張は強くありません。ヨーロッパと一緒に歩んでいこうという姿勢が非常に強いのです。

最後にスイスの話をしたいと思います。

スイスは、ほとんどの皆さんも知っていると思いますけれども、EC(EU)に入っておりません。ですから、つまりヨーロッパ統合に入っている国ではないんですね。しかし、回りはすべてEUに入っています、EUの中の孤島のような存在と言ってもいいと思います。ここでも実は同じような問題が起ってきている。スイスの場合は簡単にすませますけれども、ここでも非常に複雑な経緯があります。

スイスは、幾つかの州から成り立っているのですけれども、その州の事をカントンと申します。カントンが幾つか集まって契約を結んでスイスと言う連邦国家を作ってきたということなんです。周囲の他の国に翻弄されないように、我々は永世中立を保つ。したがって、他の国に侵略しませんから、自分達には中立を認めて欲しいという要求をしてきたわけです。国語としてはドイツ語(スイスドイツ語という書き方をしましたけれども)、フランス語、イタリア語、レトロマン語(これはあとで説明しますけれども)と、四つを国語としています。また公用語としてはドイツ語とフランス語とイタリア語、この三つを公用語としています。公式には四言語体制という風に言われています。

レトロマン語というのは、何かと申しますと、第二次世界大戦前ドイツ系住民はドイツ以外の国に沢山いました。ポーランドとかチェコにいたわけです。その為、第二次大戦中、ドイツは、ドイツ語系の住民を保護するという名目で他の国に侵略していったわけです。そういう歴史があります。実はスイスの中にもドイツ語を話す人達があります。マジョリティーがそうです。ですから口実としては、スイスのドイツ語地域もドイツだという口実があったわけです。

ね。

同じような事がイタリア語についても言えます。ムッソリーニのファシスト政権でしたけれども、イタリア語を話す人がスイス南部に存在します。この地域はイタリアだという口実ができあがるわけですね。スイスとしては侵略されては困る、とういことからですね、ドイツ語、フランス語、イタリア語に加えて、四番目の言語、レトロマン語、これは少数で、もともとそこに暮らす人達が使用したある地域の言葉なんですけれども、この言葉を第四の国語にしたんです。つまり固有の言葉だということです。われわれは、フランスでもイタリアでもドイツでもないんだということ、それによって侵略を防ごうとしたという経緯があります。ですから、永世中立というのは微妙な問題でして、厳しい現実の中で作られてきたものだと思いますけれども、だからこそ、レトロマン語が必要だったわけですね。こういう状況です。この結果、四言語体制と言うものが出来上がったわけですね。

ところがドイツもスイスもその後、状況は大きく変わりました。EC統合が進行する事によって、あるいはソ連などの社会主義政権が崩壊する事によって、要するに戦争が起こる危険性がなくなったわけですね。ユーゴスラビアは別としてですね。西ヨーロッパで戦争が起こるといふ心配がなくなったわけですね。中立政策を進める必然性がなくなってきたわけですね。それが大きな変化の一つです。

それからもう一つの大きな変化はそこにも書きましたけれども、要するにスイス内での先進地帯とそうでない地帯との分極化です。先進産業地帯はだいたいドイツ語系地域とフランス語系地帯ですね。東南の方はスキー場などはありますが、あまり産業がありません。レトロマン語が存在するダボスとか、そういったところは、谷間地帯でほとんど産業がない地帯です。スキー場くらいしかないといい場所です。したがって、その地域の人達が就職するためには、ドイツ語が必要になって来るわけですね。ですから、レトロマン語を捨ててドイツ語に変わろうと言う動きができてきて

いる。

イタリア語の場合も同じです。見るべき産業がありません。四言語体制といっても、ドイツ語とフランス語は確固としている。イタリア語は半分くらい。レトロマン語においてはほとんどなくなってきている。ですから、今は、いわば二・五言語体制になっていると言われているわけです。以前は、国際安全保障上から、永世中立政策はできていたのですけれども、永世中立を維持する状況ではなくなってきているということですね。

もうひとつの言語の点で面白いのは、要するにヨーロッパ統合が進んでいるということですね。さらにグローバル化が進んでいること、特にこの現象は、金融とか情報とか経済という点で進んでいます。金融とか情報とか経済のグローバル化が進むと何語が広がるかというと、それは英語です。したがってスイスの人達が二番目に学ぶのは、例えばドイツ語系の人達が二番目に学ぶのはフランス語ではなく、英語になってきているのです。またフランス語系のスイス人が二番目に学ぶのも、ドイツ語ではなく、英語なのです。こうなると、スイスでは「スイスとは何なのか？」というアイデンティティの危機という現象が起ってきます。

一九九二年にEC加盟ではないんですけど、EAというですね、ECに準加盟してECと一緒にやっけて行く、つまりヨーロッパ経済領域と言う共通の空間を作ろうという提案が連邦政府からなされまして、国民投票がなされました。いわばEC加盟といってもいいと思いますけれども、それに対して国民はどういう反応をしたかと言いますと、大多数が反対だということです。つまり、ECには入りませんということです。

ところが面白いことに、人によって地域によって、賛否をめぐる状況がかなり違ったということです。ドイツ語系イタリア語系は反対、フランス語系は賛成という状況が生まれたわけです。ドイツ語系の場合にはもともと「原初三州」と申しますけれども、元々のスイスの核になっているところがあるということで、スイスのナショナルリズムが非

常に強いところでは。そういうことから、ECに加盟すると、スイスのアイデンティティが失われるという事があったのだと思います。

それから、ドイツ語と書かないで、スイスドイツ語と書いたことに注目していただきたいと思います。彼らはドイツ語を話しますが、ドイツのドイツ語とは区別しているということです。これは非常に重要な点です。それで、かれらはドイツ語ではなく、スイスドイツ語を話すということです。ということは、ドイツに対して非常に警戒心が強いということです。先程のナチスの戦争の事を思い出していただければわかると思います。類似したことがイタリア語にも言えると思います。そういうことから、現在でも歴史的な警戒感が尾を引いていると言えるでしょう。それから、ヨーロッパに入ると不利益と言うか、外国人労働者も入ってくるということから臆病になっているということがあるかもしれません。

しかし、後からスイスに入ってきた地域、フランス語系がそうなんですけれども、スイス連邦に後から入ってきた州、そういうところとかジュネーブ、ここには国際機関があるので、そういうところでは外国人が非常に多い。多くはフランス人ですけれども、他の外国人も非常に多い。国際機関も非常に多い。ですから、外国人なしではやっていけないのではないか、フランス人と一緒になければやっていけないのではないか、という意見が非常に強いわけです。これがヨーロッパに合流したいという理由なんです。これまで非常に強いスイスの団結を誇ってきたわけですから、フランス語系と非フランス語系の間で大きな違いができてきている。これは分離とまでは言いませんけれども、今までのスイスの非常に強い団結と比べれば、非常に大きな変化だと思っています。

もう一つ面白いのは、さっきも言いましたように、スイス語とは区別されるスイスドイツ語ということです。

最後にまとめをちょっとお話ししたいと思います。時間の方もありませんので、少しとばします。カナダのケベック

クで十月三〇日に分離独立に関する州民投票が行われました。カナダからケベックが分離独立するか否かの州民投票は、実は一五年前にもありまして、これは、結局、否決されましたけれども、強い分離主義の動きがあったわけです。ここでは分離主義は、ヨーロッパと比べるとはるかに強いのですけれど、面白いのは分離運動が発展する中で、彼らはECと同じようなNAFTAという受け皿を発見したということです。レジュメには、地域統合は分離独立の経済的コストを引き下げるのか、という風に書きましたけれども、分離独立を非常にしやすくする要因として地域統合と云うものが浮かんで来ているわけです。つまりカナダとは別れますけれども、NAFTAでは一生懸命やって行きますよというですね、そういう主張が出てきているということです。

こういうことによって、三空間併存という表現が適当であるかどうかわかりませんが、少数民族の人々が自分達の主張をしやすくなってきている。仮に分離しても大きな変化と大きなコストを伴わないで分離できる。分離できるかどうかはわかりませんが、そういう主張がしやすくなってきているという風には言えると思います。

現在のヨーロッパに戻りますと、民族的な緊張は今までに比べるとなくなってきていると言えるかもしれませんが。むしろ、新しい緊張が生まれてきていると言う風に言えると思います。新しい緊張は何かと言いますと、言うまでもなく、EUの内部と外部との間の緊張ですね。内部と外部に新しい境界が引かれつつあるということです。

それから今日はお話ししませんでしたが、戦後六〇年代、七〇年代に沢山の外国人労働者がヨーロッパに入りました。フランスとかドイツ等に沢山入りました。その多くはアジア・アフリカ系の外国人です。そのなかには多くのイスラム教徒が含まれています。そういうことで文化的宗教的な摩擦と云うものが大きくなってきているということが言えるかもしれません。

今日お話ししました地域主義とか少数民族とかですけれども、実は分離主義とかそういう地域運動の中に、あまり

いいことではないんですけれども、外国人を排斥しようという動きがあるわけですね。フランドルにはフラームスブルックという、フランドル連合といってもいいと思いますけれども、こういうナショナリスト政党が出てきています。これは分離主義を主張する政党です。この人達は同時に外国人を排斥するというようなことを言っています。今日は、北イタリアについてお話しませんでしたけれども、北イタリアの北部同盟と言う政党は豊かなミラノを中心として自分達の富が貧しい南イタリアに渡るのはいけしからんと言う主張をしている政党なんですけれども、要するに連邦制を主張していると同時に、南から移住して来る貧しいイタリア人を一部では排斥しようという傾向をもっています。

こういう状況、こういう問題があるわけです。それは、マイノリティーなんですけれども、分離主義、地域主義という問題と同時に、もう一つの種類のマイノリティーである移民を排斥するということが起こりつつあるということに注目すべきだと思います。

十月三〇日のケベックの州民投票を見ても、わずかの差だったけれども、否決されたわけですね。独立は駄目という事になったわけですけども、それに反対した人達の中に、最近入ってきた移民が多くあげられています。彼らは連邦政府が自分達を助けてくれるんだという意識を持っていると思いますけれども、分離独立に反対するという勢力は、移民によって構成されているということです。こういう皮肉な現実があります。今日は、まとまった結論としては出せませんけれども、こういう状況でヨーロッパの現状が非常に複雑になってきているということです。ある面で地域主義というのは主張しやすくなってきていると同時に、今まで考えても見なかった問題があちらこちらで生まれてきているということです。

それでは、これでお話しを終わります。どうも御静聴有難うございました。



出所：R.Petrella, *La renaissance des cultures régionales en Europe*, 1978.
pp.16-17 (ただし、若干変更を加えた)

戦後西欧の地域運動発生地域